

た。試練にあったときには雪にうずもれて忍耐強く春を待つ福寿草! 蕾のままかと思いついていた花も時を経て開花したこともありました。ひょっとしたら眼には見えない花もあったかも…。

この生かす原動力と姉妹たちに支えられ神様の恵みを豊かに受けて来たことを感謝致します。神に賛美! 神に感謝!

(初誓願 1961)

シスターメリー ジュネヴェーブ 佐藤



日本宣教 70 周年を心からお祝いいたします。

私はノートルダムが日本に来られた時は中学生でしたが教会のことも聖書のことも何も知りませんでした。

友人が浄土寺町に住んでいたので「近くに新しい学校が出来て、美しい制服で私も行きたい。」と言っていました。でも友人も私も母子家庭で夢の又、夢でした。

京都に生れ、五条大橋の西詰で三方見える角家でした。祖父が建てた地下一階地上三階建てで、五山のお送り火を全部見ることが出来ました。今は高層建築で何も見えません。

私は家の手伝いをしていて「たばこ屋」をしておりました。パチンコ店などに卸していました。そこでお皿洗いのおばさんが頸にオメダイを付けていらっしやったので「それ何」と言うとその方は読み書きが出来ないのでと言って河原町教会の古屋司教様の所に連れて行かれ、お話を聞くようになり、若い友達が居るだろうと紹介された方が女性皆、修道女になるべきだという考えの方で、

シスターメリー クリスティン 畑



修練長 Sr. メリージャンのひと言、「やってみるまでは『出来ない』とは言われませんヨ!」このひとことに励まされて私の奉獻生活は始まりました。種々様々の使徒職に派遣された私は夫々の置かれた場で私なりに開花できました。この言葉に倣って私の内面に潜在していた可能性が引き出され(生かされ、福音化され)ました。時には想像すらしなかった色や形の小さな花でし

私に勧めましたが、私は我が侪だからそんな所に行けない、と断りました。神様の声に背くのは良くないと言われ、丸山神父様に相談しますと、五つの修道院に行きなさい、と言われ、女子パウロ会とノートルダムにすぐに入りなさいと言われました。私はシスターメリーポーロにお会いしてすぐに来て良いですが昔は修道院に入るために持参金やいろいろのものが必要でした。親には言えないので友人が全部準備してくれました。母に住み込みで働くと言って、入りました。

後年母は「私は裏切られた」と言っていました。修道会の御蔭で母の最後の世話が出来、母は感謝してくれました。私も修道生活をして良かったと思っています。大きい世界を知り本当に毎日感謝し、貧しい人や苦しんでいる方のために祈って過ごしています。神に感謝。

(初誓願 1961)

シスターメリー セシリア 川村



入会の動機

入会前、修道院を訪問した時、修院中庭に面した廊下でアイロンをかけておられた当時の修練長シスター・メリージャンの後姿にこれまでにない神聖なものを感じさせられたこと。

SSNDは半観想会であると聞いたこと。自分の信仰生活は浅く、これから学び信仰を深めなければならないとの自覚と、本当に神を知るようになりたいと思ったこと。

神は私の無知と誤解を通して入会へと導いて下さいました。

心に残っていること

ある日、私が町を歩いていた時、一人のお婆さんが私に向かって何かつぶやきながら手を合わせて頭を下げるのを見ました。その時、私は強いショックを受けました。なぜならその頃私は自分がシスターと呼ばれる資格はないと思い悩み苦しんでいましたし、修道服を着ているのが苦しかったのです。この苦しみは長い間続きました。けれど今、そのことを神の豊かな恵みだったのだと思えるようになりました。神は私を入会以来私に出会わせてくださった全てのシスターと人々を通して導いて下さいました。

祈り

今、この憐れみ深い神に心から感謝を捧げ、神のはからいをほめ讃えます。また、忍耐とゆるしの心で私を助け支えてくださったシスター方と神が出会わせてくださった全ての人々のご好意に祝福と豊かな報いをお与えくださるようにと祈ります。

私たちの主、イエス・キリストの御名によって。
アーメン。

(初誓願 1961)

シスターメリー フランシス 田北



1958年ノートルダム女学院に就職。

当時は、女学院で教師として教える事に専念していたので、修道会とかシスターなどについて全く考えていなかった。ある日、シスターメリーキャサリンが話しかけて来

られた。「将来どうするつもり？ 結婚するの？ シスターになるつもり？」私はびっくりした。…シスターになるなんて…。なれるはずがないのに。シスターは「なるなら今よ。」とたたみかけられる。でもその顔は真剣だった。私のようなものでもなれるなら、結婚するよりシスターになりたいと思い始めた。女学院を一年で退職して、翌年シスターとしての志願期に入った。

(初誓願 1961)

シスターメリー ベアトリス 田中



私のノビス1年目がほとんど終わろうとしていた頃の出來事です。

2月のある日曜日・静修日の寒い日だったと思います。

昼前雪の降る中を、私の両親が鹿ヶ谷の修道院を訪ねてきたのです。

修練期なので、1年は家族や友人と会えないことを両親は十分わかっていたはずですが、それなのに2人の足が鹿ヶ谷に向かったのでしょうか。

修道院の入り口のドアベルを鳴らすと受付の日本人シスターが出てこられ、静修の日曜日なので、どなたにもお目にかかることができない旨、告げられたとのこと、両親は、大きな重いドアを開けてまさに帰ろうとした時、聖堂の扉があいて、あの大柄なシスターメリージャンが出てこられたというのです。

「オー、タナカサン。コニチハ。ヨクオイデクダサイマシタ。ドゾ、ドゾ、オアガリクダサイ。」と言って、コートやショールの上の粉雪を両手で

払落し、まるで放蕩息子が家に帰ってきた時の父親のように優しく暖かく迎えてくださったのです。そして部屋の真ん中にあった丸型の石油ストーブに自らマッチで火をつけ、部屋を暖めようとされました。

娘に会いたくてやってきた自分達になんのお咎めもなく、むしろ嬉しそうにまるで待っていたかのようにもてなして下さったというのです。あの寒い冬の日のシスターメリージャンのお優しさ、忘れることが出来ないと何度もこの話を後程聞かされました。

シスターメリージャンは、志願者や修練者にとっても厳しくノートルダムシスターになるためのしつけを植え付けられました。あー何度叱られたことか。

沈黙の時間に笑ったり喋ったりするのはですから叱られるのもあたりまえです。

それでも私達は、いまだにメリージャンが大好きです。毎日、ラテン語や英語の勉強、歌の練習、川の掃除、障子の張り替え、草抜き…ありとあらゆる労働をさせられましたが、みんなみんな懐かしい思い出です。

ノートルダムのホスピタリティの原点をシスターメリージャンから教わった私達は幸せです。

(初誓願 1961)

シスターメリー ベルナルド 岩井



1959年の入会の頃を振り返り、当初の吃驚事項が、今の言葉で云うとこういふ事かと理解することが多々あり、昔から同じ精神が

SSNDの歴史を貫いていることを知る。

入会時に持参品一覧(石鹸、タオル、歯磨き、等々)によって持参した物は廊下の押し入れに。必要時に「I humbly beg for 何々」と修練長に手を合わせて願い出る。すべてを共有するという事か、と納得。

1961年誓願宣立16名の同期生は沖縄、女子大、女学院、小学校、東京、その他へと派遣。誓願の次の日「4時から職員会議。直ぐ行け」とその場で跪き、冠を外してもらい(3日間フリーデーと聞いていたが?と意思つつ)新しい職場へ直行。その後1998年3月まで女学院での使徒職に就く。(その間3回計4年間研修期間を頂く)遣わされた場で使徒職に励み豊かにされた。

あるシスターがにこやかに「ヤングシスターズ」と我々を呼び、用事を頼まれた(名前がありますと心で叫んだ)無名で「私達は神に招かれ、共同体に於いて3つの誓願を生きる」という事か。

第二バチカン公会議を受けて会憲が新しくなる時、全世界の会員との数回の応答(対話)の後素晴らしいYASが生まれた事を大変有難く、誇らしく、感謝している。

1986年銀祝でローマに1か月間の研修、11人参加する日本の事情を考慮して、7月5日始まりにして下さった。(変化への対応の豊かさ)キリスト教と、ノートルダムの遺産の豊かさに圧倒される。

同じ年9月からチャタワでのSSND刷新コースに参加。講師は殆ど全部SSNDシスターズ。あらゆる分野での人材の豊かさに驚く。

今、SSNDであることを感謝し、生涯を全うできる恵みを願っている。

(初誓願 1961)

シスターメリーアン 押山

(SSNDへの入会理由とか、自分にとってSSNDであることの喜びなどを質問)



○私はSSNDしか知らないからSSNDだからとかいう事は何も考えられない。

○私のような者でさえ受け入れてくれたという事に感謝している。

○入会に際し、母は何も言わなかったが、母の気持ち「結婚して押山家を継いでほしいと云う気持ち」は痛いほど分かっていた。

(このことに関しては、強く、何回か云った)

○SSNDであることに感謝しているし、SSNDとしての生を全うしたい。

(初誓願 1961) (文責 Sr. メリーベルナルド)

シスターメリーレオナ 松島

シスターレオナといえばお華。聖堂で個人の祈りを捧げているとき、度々シスターが祭壇のお花を手際よく生けておられる姿を目にしたことを思い出します。そして中学生から大学生、また卒業生への華道レッスン指導。サマープログラムなど、文化交流のため来日されたシスター方にも華道に触れる機会を提供しておられました。シスターは日本未生流華道師範の資格保持者です。

そのうちシスターはアートフラワー指導の資格



も取られ、教えたり、ジュビリーなどの機会に皆のためにコサージュを作ったりもされました。また、シスターたちの誕生日や修道名の祝日には手作りカードを送っていただきました。2016年から慢性心不全のため入院生活が続いていますが、神さまはきっと今でも、美を通してシスターに触れてくださっていることでしょう。

(初誓願 1961年) (文責 Sr. ジュディス)

シスターメリーレジナ 樺山

初めて最初の4人のシスターズにお会いしたのは来日なさって直ぐの頃でした。

奈良教会を訪問なさった時の事、私達聖歌隊は習いたての英語のクリスマスキャロルを歌って歓迎しました。威厳に満ちたシスターズに接し、とても感動しましたが、まさかその時はその数年後私がおそのSSNDのメンバーになるとは思いもしませんでした。

キャロルで歓迎した数日後私達はメリノールの修道院に招かれ、再び、4人のシスターにお会いするチャンスがありました。その時のシスターリチャードン(メリールイーズ)の青い目と若く澁澁とした姿に圧倒されました。その時シスターリチャードンが「ブルースカイ」を歌って下さいました。私達はお名前が分からなかったのでシスターブルースカイと呼ぶようにしました。

それからかなりの年月が経ったある日、ND女学院の運動会を見に行きました。その時、シスターブルースカイがああロングハビットの裾をたくし上げ、生徒と共に走り回って居られる姿が目にとま



りました。いままでの修道女のイメージではなく生き生きとした教育者であると強い感銘を受けました。私が入会を希望したのはそれがきっかけとなりました。

修練長シスターメリージャンの印象的なお言葉としていつも心に残っている事があります。

“出来ません”という言葉の代わりに“やってみます”と言いなさい。と私は今アメリカで祭服関係の仕事に励んでいます。言葉も生活様式も違う所でしかも長年の教育の仕事とはかけ離れた使徒職を19年余りも続けられたのはあの言葉が根底にあったのではないかと思います。

勿論全てにおいて神様のお助け、お導きがなしでは考えられませんが。

(初誓願 1961)

シスターメリー ジャメイン 棚橋

鹿ヶ谷に着いたとき、大きな木々はささやいた、静かなお庭はささやいた。

『待っていたよ』とそんな感じでした。今までの心配や不安が、すっと落ちた感じ。ここに来てよかったのだと…。

私は修道者になれるとは思ってもいなかった。学歴もなく信者としても何もわかっていない。でも呼ばれているという思いが続く。ヨナのように逃げまわったり、神さまと賭けもした。色々ありましたが、伊勢湾台風によって、ノートルダムに運ばれました。そして温かく迎え入れていただきました。

まったく新しい日々が恵みのうちに始まりまし



た。ミSSIONナリーのシスター方の熱意、先輩のシスター方によって徐々に徐々に導かれた日々が56年になりました。私の使徒職は殆どは食堂の仕事でした。

神さまが与えてくださった多くの恵みに感謝しそのうちのシスタードリーンを思い出します。私は11年間シスターと共に働き、一から教えられ又シスターの生き方に導かれました。シスタードリーンは台所の仕事その他、洗濯、ウインブルの糊付け等など下ずみの仕事を、深い信仰のうちに誇りを持って見事に果たされていました。又人々への深い思いやり、ユーモアは皆を和ませてくれました。(物資も少なく国も違い大変だったと思います) お互いに言葉も良く通じない中で、困ったこともなく深い関わりもたせて頂いたことは本当に大きなお恵みでした。幸せな初期養成だったと思います。この体験は今に至るまで助けになっています。

(初誓願 1962)

シスターメリー ピートラ 加藤



私は鹿ヶ谷にノートルダム女学院中学が創立された年、1952年に第一期生として入学した。その後6年間生徒として在籍し高校卒業と同時にノートルダム教育修道女会に志願者として入会。SSNDの何に、SSNDのどこに魅力を感じたのか、また私に入会を強く促したものは(ことは)何であったかと問われたら、シスター方の笑顔と答える。シスター方の美しい笑顔に出会う度に、修道院の門の中にはどんな素晴らしい

世界があるのかと、心がわくわくした。

(初誓願 1962)

シスターマリアン 兎玉



岐阜に住んでいた私は神父様から紹介されて、京都のノートルダム教育修道女会を訪問しました。その時、私の心を惹きつけたのは、シスター方の明るさでした。

その姿から、神様に仕えることの尊さと喜びを知りました。

(初誓願 1962) (文責 Sr. ピートラ)

シスターメリールーシー 江頭



初めて京都のノートルダム教育修道女会を訪ねた時、鹿ヶ谷修道院に着いたのは夕方でした。玄関の前に立った時、横の聖堂からお祈りの声が聞こえてきました。静かな中に素直な自然な声が心を打ち、しばらく耳を傾けておりました。修道院ではノートルダム教育修道女会のシスターに始めて会いましたが、よくお話ができました。翌日は午後から帰るため、準備をして廊下に出ておりましたら、ハビットを着た二人のシスターが学校から昼食のために帰って来られたのに出会いました。その歩き方が元気ではつらつ

としていて、私は嬉しくなりました。来たときに感じたお祈りの声とこの二人のシスターの元気な明るい姿で、私はこの修道会にとっても好感を持ちました。

入会を許されてから60年、ノートルダム教育修道女会で育てられ、今、人生の最後の段階を感謝のうちに歩んでおりますが、ノートルダム教育修道女会に感謝! 神に感謝! すべてに感謝します。

(初誓願 1962) (文責 Sr. ジョアンナ)